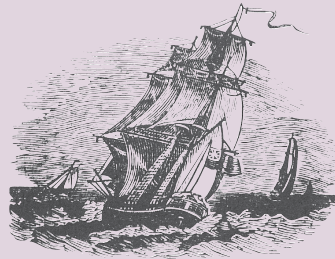


羅針盤



小麦が原因となる皮膚疾患は奥が深い！

森田 栄伸

Eishin Morita

島根大学医学部皮膚科 教授

私がまだ研修医であった頃、羽曳野病院の皮膚科部長であった青木敏之先生（現あおきクリニック・かゆみ研究所）が広島にお越しになり、お話を拝聴する機会がありました。講演の中で小麦蕁麻疹の症例をお話いただいた記憶があります。当時、医師として駆け出しであった私は、（小麦の蕁麻疹なんて聞いたことがない、滅多にない病気であろう）とあまり気にも留めませんでした。

その後、ドイツ留学から帰国して、再び広島大学皮膚科で診療を始めた頃、パンを食べて通勤中にアナフィラキシーが生じる患者さんを経験しました。その頃、食物依存性運動誘発アナフィラキシーという病型が皮膚アレルギー学会でも時に報告されるようになっておりました。小麦が原因となる場合が多く、また運動のみならずアスピリンにも症状が誘発されることが報告され、その奇妙さにとっても興味をもちました。広島大学皮膚科でも食物負荷にトレッドミルによる運動負荷を加えて、蕁麻疹が再現される症例を何人か経験することができました。

当時、広島大学皮膚科学教室にいた山村有美先生から「小麦の抗原解析をやってみよう」と言われ、患者さんへの皮膚テストや、血清を使ったプロットイングなどと一緒に抗原の同定をすることになりました。当初（小麦の蛋白質なんかどうなっているかわからないのだから、どうせ面白い話にはならないだろう）とあまり期待していませんでしたが、ゲル濾過で部分精製したグルテン抗原分画を使ってウエスタンブロットをしたところ、山村先生の熱意からか思わぬシャープなバンドがでることが



わかりました。

私は研修医時代から蛋白質の分析を行っていたため、この小麦依存性運動誘発アナフィラキシーの抗原分析に俄然興味が沸き、島根大学に転任してからは主要な研究テーマとなりました。広島大学薬学科大学院を卒業後、湧永製薬で研究していた松尾裕彰先生を研究室に迎えてからは、小麦抗原の本格解析を開始、グルテン中の ω -5グリアジンが主要な抗原である

こと、リコンビナント ω -5グリアジンを利用したIgE検出法はきわめて感度・特異度の高い診断法になり得ることなどを明らかにしました。また、運動負荷やアスピリン負荷にて症状が誘発される機序は、これらの要因が抗原吸収に関与していることも示すことができました。

しかし、小麦が原因となりアレルギー症状をおこす患者さんの臨床症状、病態は多彩です。小児では小麦製品にて即時型アレルギー症状を来しますが、年齢が長じてくると食物依存性運動誘発アナフィラキシーが多くなります。また、小麦粉を吸入して喘息症状を来す baker's asthma や小麦が皮膚に接触して蕁麻疹をおこす接触蕁麻疹の病型もあります。昨年は小麦が原因となり血管性浮腫を来す症例が報告されました。多彩な症状を示す患者さんに対して、私たち臨床家はこうした多彩な病型を理解して診療に望む必要があります。この特集号では「食物と皮膚」とのテーマで小麦を中心に食物により引き起こされるさまざまな病型を集積記載しました。本誌が食物によって生じる皮膚症状の診療、研究の指針となれば幸いです。